

「足りるを知る」

1. 「一握りの成功者」

右掲は、前グーグルの日本法人名誉会長だった村上憲郎さんの案内文です。8月22日にIBM系のソフト会社の団体「ユーオス関西」がフェアを開催したのですが、その時のスペシャルトークライブの切り抜きです。

講演を聞く限り、京大を卒業された後、日立に入社されてコンピュータ畑でSEからスタートされたようです。その後、DECを皮切りに外資系で活躍されたそうです。氏の発言によると当初は英語がダメな部類だったが、英語CDを聞き流す方式で英語力を身に付けられたようです。

英語力を身に付けてグーグルなどで活躍されたのですが、90分の講演で強調されたことは「これからの時代は、インターナショナルからグローバルを超えてトランスナショナルな時代になり、英語で考えて行動できる人が求められる」という主旨の事でした。現地法人で現地採用の社員と英語力を発揮して経営などを推し進める人材像を話されたのですが、その話は一握りの方たちの話で、逆に、BOP (Base of the Pyramid) に位置する大多数の国内に残る日本人はどうなのかという疑問が残りました。

村上さんの話を聞いていて、外資系を渡り歩いたことが本当に成功なのかという疑問がヨギルのです。本当に、実力があり実績をあげた方なら転々とするのだろうかという疑問です。お話しを聞いていて、村上さんが転々としたのは運がよかっただけではないかという印象を受けたのです。一つ転んでいると危うい状況だったかも知れないというリスクな印象なのです。こんな印象なので「英語で考える」とか「トランスナショナルな人材」と言われても素直に受け入れられないのです。逆に、「知足」という言葉が浮かんで来るのでした。

2. 「知足」

確かに、村上さんのように語学力を活かして国際的に活躍される方が多くなると思いますが、それらは「一握り」の超エリート族なのです。超エリートとして華々しい活躍があるかも知れませんが、トータルに見ると「幸せ」と言えるかどうかは疑問であります。自分自身は思い通りなのかも知れませんが、家族は振り回されるだけかも知れません。こういう視点で考えると必ずしも成功者とも言い難いと思います。

私は、この観点で言えば「負け犬組」かも知れませんが、家族を含めたトータルな幸せという意味では遜色ないと思うと同時に誇りに思っています。同じ人生を歩むにしても「大切なもの」の基準をどこに置くかで差異が出るかも知れませんが、ただ「人に役立つ」という意味では、いろんな人生があって然るべきと思っています。地位とかお金とかが基準ではなく、世の中に貢献したか否かでみれば、いろんな尺度で変わってくるのです。

特に、日本古来から「知足」という言葉を重んじられてきたという背景を考えると異文化の中で「不足」との戦いに明け暮れるのは大変な事柄と思われれます。日本国憲法にいう「健康で文化的な生活」という基準で考えると多くの国民は充足していると思います。何故なら、日本はBOPではなく、高いレベルの国に入るからです。確かに、他人と比べると遜色が出るかも知れませんが、十分に栄養のある食事をとり、安らかに暮らす環境に恵まれているという点では、大多数の国民が満たされると思います。そこには「語学力」が必須という訳ではないのです。勤勉に働く事で安定した生活を営めるのです。そういう意味で「足りるを知る」=「知足」がポイントになるのです。



テーマ:グローバル時代を生き抜く

元Google米国本社副社長兼GoogleJapan代表取締役社長
前Google日本法人名誉会長
株式会社村上憲郎事務所代表取締役

村上 憲郎 氏

京都大学工学部資源工学科卒業。日立電子、DEC取締役、Northern Telecom JapanとNortel Networks Japanの社長兼最高経営責任者を歴任し、Docent Japanを設立。e-ラーニング業界でリーダーシップを発揮。2003年Google米国本社副社長兼Google Japan代表取締役社長に就任。日本におけるGoogle全業務の責任者を務める。2009年から2011年まで名誉会長。
著書に『村上式シンプル仕事術—厳しい時代を生き抜く』『一生食べられる働き方』『3.11後日本経済はこうなる』など。

3. 「幸せ」とは

ゴルフでも優勝と2位では大きく結果が違います。アマならば、「あの大会で2位になった」と言っても価値があるかも知れませんが、プロの場合、例えば、優勝ならばカップと賞金を仮に2000万円とすると2位は半分になってしまいます。同じスコアで上がってもプレーオフで負けたら栄光はなく、賞金もガクっと下がってしまうのです。

こういう風に書くと優勝が全てのように響きますが、一年とか長期にみると全勝できる訳ではなく、いろんな人にチャンスは巡ってくるのです。ところが、力のある選手が日本国内であきたらずアメリカ・ツアーにでかけると並みの選手になる場合が多いのです。例えば、石川選手は、幼い頃からアメリカで活躍する姿を描いて語学力を身につけていたのですが、日本国内での力量ではアメリカでは並みでしかないのです。

おそらく、石川選手は収入的に問題なくとも、他の選手との比較でフラストレーションの塊になっていると思われます。予選を通ることが精一杯の状態が続いているのです。確かに、シード権をとれるという事は素晴らしい事ですが、精神的な満足には程遠い状況なのです。しかし、日本国内で「お山の大将」でいてもアメリカで試したいという欲求にかられるものと思います。

プロスポーツ選手と一般のビジネスマンと同じとは言えないでしょうが、例えば、国際的な企業に勤務していて、先頭を走る方は、海外での成功というのは大きなポイントになると言えます。その意味では語学力がある方がよいと言えます。しかし、家族という視点でみると、子供が幼い頃に海外勤務になると子供の教育や成長という点で厳しい環境になるケースが多く、帰国子女の問題として取り上げられるのです。

仮に、自分は出世が叶ったとしても家族的に問題が発生すれば、トータルにみれば、自分の人生を振り返る時に大きな悔いが残るように思うのです。出世レースで勝ち抜いた末、家族がバラバラで最悪、離散となったら「幸せ」とは言えなくなると思います。真の意味で「幸せ」を考える必要があります。

4. 「知足」も一つの「幸せ」

このように、「幸せ」を考えるとトップランナーばかりが正解ではないのです。トップを走るには、いつ追い抜かれるかという焦りを常にひきずる事になり、休む暇がないのです。しかし、2番手3番手であれば、トップのする事が見えるので対抗策を打ち立てやすいのです。現実的に、中小企業の状況を見ると若い時にトップを走った方が出世しているか考えると意外にいないのです。案外、2番手や3番手だった方が役員になっているのです。

何故なら、中小企業の場合、トップを走るには、何もかも自分で切り拓く必要があるのです。自分で切り拓くという精神的エネルギーは強大なものになるので、逆に、中小企業の器からはみ出してしまうのです。少しの不満に耐え切れなくなって、独立したり、他社に移ったりするのです。その点、2番手3番手は、そこまで精神的エネルギーが高くないので「知足」を感じる余裕があるのです。少々の不満があっても、紛らわす方法を身に付けているのです。いわゆる、処世術を心得ているのです。

私は、「知足」という言葉で随分救われた経験があります。独立して会社を起して従業員を雇うようになると「知足」の精神的余裕がないと経営という事が非常に難しくなるのです。「人」に求めるレベルを少し下げると自分の「不満」が解消して、その方の長所が輝いてくるのです。この人はこういう能力があるのだと足りるを知るとその能力を伸ばす方向で考えられるようになるのです。この事は非常に重要なポイントと思います。